第10章　怪　　鳥

本章で紹介するのは有翼の怪物たちである。すでに見たセイレーンもある意味では怪鳥と言ってよいのかもしれない。実際、セイレーンたちが船乗りを虜にするために歌ったように、ここで見るハルピュイアもスフィンクスも、予言ないし謎をそれぞれ歌で示している。

1　ハルピュイア

ハルピュイアという名前は、「さらう、奪い去る」を意味するギリシア語のハルパゾー（harpazo）に由来するとされる。ホメーロスではとくに鳥の形象が語られることはなく、「人さらいのつむじ風」として言及される（『オデュッセイア』一・二四一、二〇・七七）にすぎない。

ハルピュイアが鳥の姿を取るのは、ゼウス神の意志によってピーネウスという予言者に処罰を加える存在としてである。すでに触れたプロメーテウスを鷲が襲う話を思い起こさせる物語のパターンであるが、ヒュギーヌスには次のように要約されている。

ピーネウスはアゲーノールの息子で、トラーキアの人であった。妻のクレオパトラとのあいだに二人の息子をもうけたが、継母の罪により父親が彼らを盲目にした。ピーネウスもアポッローン神から鳥占いの術を授かったと言われる。しかし彼は、神々の考えを人々に知らせたため、ユッピテルによって盲目にされてしまった。そのうえ、神は彼の隣にユッピテル［ゼウス］の犬と言われるハルピュイアたちを配置し、彼が口にしようとする食べ物を奪い取らせた。

（『神話伝説集』一九・一―二）

ピーネウスがハルピュイアに苦しめられていた場所はボスポロス海峡のあたりであったとされ、ロドスのアポッローニオスはこれをヨーロッパ側の岸にあるテューニアの地とし、その様子を次のように叙述している。

ゼウスは彼に食を味わうことを許さなかった。というのも、数々の料理をいつも近くに住む者たちが予言を聞くたびに彼のところまで届けてくれていたが、雲間を裂いて突如として間近に襲来するハルピュイアどもが、嘴で彼の口元や手元からいつでも食べ物を奪い去ってゆくからであった。残してゆく食べ物はまったくないか、ほんの少し生きる苦しみを味わうためだけのもの。そのうえ、厭わしい臭いを注ぎかけたため、それを誰一人あえて口まで運ぼうとする者はなく、ただ遠く離れて立つのみ。食べ残しはそれほどの臭気を放った。

（『アルゴナウティカ』二・一八三―一九三）

しかしピーネウスは、ゼウスから聞いた予言により、アルゴー船の英雄たちが立ち寄ったときに、ボレアースの子ら、つまりゼーテースとカライスの双子の英雄がハルピュイアたちを追い払うことを知って

いた。彼らの到着を知るや、ピーネウスは、残っていたわずかな力をすべて使って英雄たちの前へ這い出ると、彼らに助けを乞うた。

ハルピュイアどもを止めると予言されているのはボレアースの息子らだ。彼らは無縁の者のために食い止めるのではない。私はかつて人々のあいだに名高きピーネウス、富と予言の術をあわせ持ち、アゲーノールを父として生まれた者、トラーキア人の王であったときに、彼らの姉クレオパトラを結納の品でわが家へ妻として迎えたのだから。

（同一・二三四―二三九）

それが実現した次第は次章に譲るとして、ハルピュイアたちはテューニアからペロポネソス半島の向こう側まで追い払われて、ストロパデスと呼ばれる島々に住み着くことになった。そこへ、こののち、陥落したトロイアを脱出してイタリアを目指す旅を続けるアエネーアース一行がやってくる。

ストロパデスはギリシア人による呼び名で、広大なイオーニア海に群島をなす。そこには恐るべきケラエノーと他のハルピュイアどもが棲んでいる。それ以前にいたピーネウスの館を閉ざし、恐怖ゆえに、それまでいた食卓を見捨ててきていた。彼女らよりいっそうまがまがしい怪物も、いっそう過酷な災いと神々の怒りも、ステュクスの流れから立ち現れたことはかつてない。怪鳥は乙女の顔をもつが、腹からきわめて汚らわしい排泄物を出す。手の爪は曲がり、顔は飢えでいつも青ざめている。

（ウェルギリウス『アエネーイス』三・二一〇―二一八）

ここに着いた英雄たちが食事を始めると、ハルピュイアらが襲ってきて、食べ物を汚し、悪臭を振り撒いた。この怪鳥たちをなんとかかろうじて退散させることができたものの、その頭目たるケラエノーは

不吉な予言を残した。

「戦争までするのか。牡牛たちを殺し、牝牛を屠った償いに戦争を仕掛けようとするのか、ラーオメドーン[1]の子孫よ。罪のないハルピュイアを父祖の王国から追い出すつもりか。ならば、心して聞け。私のこの言葉を聞いて胆に銘じよ。これは全能の父がポイボスに、ポイボス・アポッローンが私に予言したこと、これを復讐女神の長たる私がおまえたちに明かそう。イタリアがおまえたちの航路の目的地、風を呼び、イタリアへ着けるであろう、港に入ることも許されよう。しかし、約束された都を城壁で取り囲むまでには、まず、われらに加えた不当な殺戮ゆえの忌まわしい飢えがおまえたちに食卓をかじらせ、顎で噛み砕かせずにはおかない」。こう言うと、彼女は翼に乗って森の中へ逃げ去った。

（同三・二四七―二五八）

ケラエノーの予言はその後、現実となる。しかし、予言のおぞましさとは裏腹に、現実となった出来事はアエネーアースたちを明るい気分で満たすことになった。というのは、イタリアの岸に艦隊を舫(もや)った直後、食事の際に彼らは草の上に薄く焼いたパン皮を敷いて、その上に食べ物をのせたが、食べ物が少なかったためパン皮まで食べたことから、これが飢えのために食卓をかじるという予言の実現と解釈され、これにより苦難に終わりがもたらされると考えられたからである。しかし、一つの苦難の終わりはまた別の苦難の始まりでもあった。アエネーアースを苛む苦難については、また後述する[2]。

2　ストリクス

ハルピュイアには、オウィディウスによると、親類がいたらしい。

さて、強欲な鳥たちがいて、あのピーネウスの食卓を襲ってひもじい思いを弄んだ鳥ではないが、その種族の血を引いている。大きな頭、見開いた目、獲物をさらうにすぐれた嘴、白斑の入った翼、そして鉤爪を備える。夜に飛び出して、乳母のついていない子供を襲い、揺籃からさらった体に悪さをする。うまそうな血の滴る内臓を嘴で啄むといい、喉には飲んだ血がいっぱいに詰まっている。この鳥たちの名はストリクス。だが、この名の由来は、いつも夜に身の毛のよだつような声で鳴くことによる。だから、はじめから鳥に生まれついたのか、それとも、呪文で変えられたのか、つまり、マルシー人の呪術のために老婆の鳥の姿となっているのか、いずれにせよ、彼女らがプロカの奥殿へやってきた。そこで生まれて五日目のプロカがこの鳥たちの新しい獲物となった。鳥たちは幼子の胸を強欲な舌で貪り喰おうとする。と、不幸な少年は泣き声を上げて助けを求める。養い子の声に驚愕した乳母が駆けつけ、両頬が固い爪に割かれているのを見つけた。どうすればよかったろう。顔の色はと見れば、まだ散り忘れていた木の葉を冬のはじめの寒さが痛めつけた、そのような色だ。乳母はクラーネーのところに来て、わけを話す。クラーネーは言った。「心配は無用。あなたの養い子は大丈夫だから」。そして、揺籃のところに来ると、泣いている母と父に「あなたがた、涙を流すのはやめなさい。この私の手で治してあげましょうから」と言った。

すぐさま、三度続けて木苺の枝で門柱に触れ、三度木苺の枝で敷居になにかしるしをつける。門口には水を撒く。水も薬効があるからだ。そして、生まれて二カ月の牝豚から取った生のはらわたをつかむと、こう言った。「夜の鳥たちよ、子供のはらわたにはお目こぼしください。小さな子の代わりに小さな犠牲を屠ります。どうかお願いです。心臓の代わりに心臓を、はらわたの代わりにはらわたをお取りください。あなたがたにはこちらの命を、よりよき命の代わりにあげましょう」。

こうして犠牲を捧げ終えると、クラーネーは開いたはらわたを天日のもとに置き、儀式に居合わせた人々に振り返って見ないよう命じる。そして、白い山査子から作ったヤーヌスの杖が、奥殿の小さな窓から光の差し込んでいたあたりに置かれた。その後は、鳥たちが揺籃を踏みにじったことはないと言われる。子供にも、以前にあった顔色が戻った。

（『祭暦』六・一三一―一六八）

ストリクス（strix）はミミズクかフクロウの一種ともされるが、名前の由来が「身の毛のよだつような声で鳴く」というのは、この意味のラテン語がストリーデレ（stridere）であることを指し、この語源説は真説と考えられている。

さて、ここでストリクスに襲われたプロカはローマの母市となる都アルバ・ロンガの王で、引用の物語は、王の命がクラーネー（Crane）というニンフによって救われたことを語っている。クラーネーはカルナ（Carna）という女神となって、ローマで古くから信仰された。オウィディウスは、カルナの語源について、観音開きの門の回転軸と軸受けの接合部分である「枢」を意味するカルドー（cardo）から説明しようとするので、クラーネーが門戸の神であるヤーヌスと結ばれて、神から枢を司る力と厄除けの山査子を授かったとし、この山査子の杖でニンフがストリクスを撃退したという話にしている。しかし、マクロビウスによると、この女神は人間の命に関わる器官を司ると信じられていたため、女神が肝臓や心臓などの内臓を健康に保ってくれるように祈願がなされたという（『サートゥルナーリア』一・一二・三一―三二）。それはともかく、いずれにしてもストリクスが人間の血肉を喰らうというイメージははっきりしていた。

プラウトゥスの喜劇『プセウドルス』には次のような科白がある。

こういう連中が宴の料理の味つけをしてるところじゃ、調味料じゃなくて、ストリクスを味つけに使うんだ。こいつは生きたままの宴の客の内臓を食いつくす。これだから、このあたりの人の命はこんなに短いんだ。

（『プセウドルス』八二〇―八二二）

言及されているのはいまで言えばハーブをたっぷり利かせた料理で、そんなわけの分からない草ばかり詰め込んだ料理なんか牛も食わない、食べれば命を縮めるだけだ、と料理人が毒づいている。ただし、こう言う料理人にしてからが一癖も二癖もある男で、出張料理をすれば、すぐに鳶（とんび）や鷲の爪を出して家のものを失敬するというのだから、とにかく用心が必要である。

他方、セネカの悲劇『メーデイア』には、メーデイアが毒を作る様子を彼女の乳母が描写するくだりがあり、その仕上げのところで、

死をもたらす草を摘み、蛇の血膿を絞ると、これらにおぞましい鳥たちを混ぜる。悲しげに鳴くフクロウの心臓としわがれ声のストリクスを生きたまま割いて取り出した内臓だ。

（『メーデイア』七三一―七三四）

と語られる。メーデイアの怨念の込められたこの毒ならば必殺であろうと、想像しただけでもなにか背筋が寒くなるようである。

3　ステュンパーリデス（ステュンパーロスの鳥）

ペロポネソス半島の中央に位置するアルカディア地方にステュンパーロスという町があり、同じ名前

の川が流れ、その水源がやはり同じ名前の湖であった。このステュンパーロスについて、パウサニアースは次のような記事を残している。

ステュンパーロスの湖水をめぐって伝わる話によると、かつて人間を食べる鳥がそこを餌場とした。この鳥たちをヘーラクレースが射落としたと言われる。だが、カミーロスの人ペイサンドロスは、殺したのではなく、鉦（かね）の音で追い散らしたのだ、と言っている。アラビア人の国の砂漠に産するものに、他の野獣とともにステュンパーリデスと呼ばれる鳥があり、これはライオンやヒョウに劣らず人間に対して強暴である。これらは自分たちを狩りに来た者たちに襲いかかり、嘴でつついて殺してしまう。実際、どれほど青銅や鉄の武具を人間がまとっていても、それをすべて鳥たちは切り裂く。しかし、服を藺草（いぐさ）で分厚く編んだ場合には、ステュンパーリデスの嘴は藺草の服から外れなくなる。ちょうど小鳥の翼が鳥もちにかかるような具合である。この鳥たちは鶴ほどの大きさで、トキに似ているが、嘴はもっと力強く、トキのように曲がっていない。

（『ギリシア案内記』八・二二・四―五）

鳥たちをヘーラクレースが退治したことは、有名な十二の難業の五番目もしくは六番目に数えられるが、引用にも見られるように、英雄がステュンパーリデスを殺したのか、それとも追い散らしただけなのかは、はっきりしない。アポッロドーロスなどは、青銅の鉦で追い散らした、と記しながら、物語を「このような仕方でヘーラクレースは鳥たちを弓で射た」（『ギリシア神話』二・五・六）と結んで、わけの分からない話にしている。分かれ目は、ヘーラクレースという英雄に剛勇だけを見るか、それとも、機転も備わっていたと見るかの違いにあるのかもしれない。というのも、シキリアのディオドーロス

は、鳥の数があまりに多すぎたため、力だけでは無理で一計が必要だったとして、この難業が技術と才能によって果たされたと強調する（『歴史』四・一三・二）一方、スミュルナのクイントゥスは、ヘーラクレースの孫エウリュピュロスがトロイア戦争に参戦したときに携えてきた盾に英雄の十二の難業が描かれていたとして、その武勇を象徴する絵柄の中で、

鳥たちは矢に射られ、土埃（つちぼこり）にまみれて息の尽きるものもあれば、なお逃げようとの一心で灰色の空を突いて急ぐものもある。これらにヘーラクレースは怒り狂いつつ次から次とやむことなく矢を射かけた。

（『ホメーロス後日譚』六・二二七―二三一）

と描写するからである。

さて、ロドスのアポッローニオスは「追い散らし」説を採用し、鳥たちがステュンパーロスを去ったのち、黒海の東の端、コルキスに近いアレースの島に移り住んだとして、ここでアルゴー船の英雄たちがステュンパーリデスを撃退した、という話にしている。船が島に近づいたとき、一羽の鳥が舞い降りてきて、

船へと鋭い羽根を放った。それが左肩に当たった尊いオイレウスは手から櫂（かい）を取り落とし、命中した羽根の矢を驚愕して見入った。

（『アルゴナウティカ』二・一〇三五―一〇三八）

続いて飛来した二番目の鳥をクリュティオスという英雄が射落としたあと、アンピダマースという英雄がみんなに矢では太刀打ちできないからと一計を提案した。

ヘーラクレースも、ステュンパーロスの水面を滑る鳥たちを弓で追い払えなかった。それを私はこの目で見た。しかし、彼が青銅のガラガラを両手で震わせ、高い頂の上で大きな音を立てると、鳥たちは遠くへ逃げ、混乱と恐怖の叫びを上げていた。だから、いまもこのような策をなにか考えよう。私自身が考えたことを言わせてもらえば、頭に高い毛飾りのついた兜を被ったうえで、交代で君たちの半分が櫂を漕ぎ、半分が磨き上げた槍と盾で船を護るんだ。それに、全員一斉に張り裂けるくらいに叫び声を張り上げよう。怯えさせるんだ、普段聞かない大音声や見ることのない毛飾りの揺れや高く差し上げた槍でな。いったん島に着いたら、そのときは、叫びを上げながら盾を打ってすさまじい響きを轟かせよ。

（同二・一〇五二―一〇六七）

この策を英雄たちが実行した結果、ステュンパーリデスは、

彼らに羽根を雨あられと放ちながら、海のはるか上を向こう岸の山へと飛び去った。

（同二・一〇八八―一〇八九）

という。このあとの鳥たちの消息は知られていない。それにしても、パウサニアースが考えるようにこれらがアラビアの砂漠を起源とするなら、どうして湖水や海に浮かぶ島に棲み着いたものか不思議である。

4　スフィンクス

「怪鳥」という範疇からは少しはみ出すかもしれないが、有翼の怪物として有名なものにスフィンク

スがある。この怪物が登場するのは、これもまた誰もがよく知る英雄オイディプースをめぐる物語の中である。オイディプースはテーバイ王ラーイオスと后イオカステーとのあいだに生まれたが、父を殺し、母と交わるという神託が下されていた。そのために両親は幼子をキタイローン山中に捨て子にしたが、拾われてコリントス王家の子として養育される。成人してのちオイディプースは自分に下されている神託を知るや、その実現を避けるために故郷を旅立つ。しかし、その途中で実の父とは知らずにラーイオスを殺したあと、テーバイへ着く。このとき、アポッロドーロスの記述によると、

クレオーン王のもとで小さからぬ災いがテーバイを襲った。ヘーラーがスフィンクスを送ったためである。これはエキドナを母とし、テュポーンを父とし、顔は女性、胸と足と尾は獅子であり、鳥の翼をもっていた。ムーサたちから謎を学び、ピーキオン山の上に座を占め、テーバイ人らに謎を仕掛けた。その謎とは、声（「姿」との解もあり）は一つのままだが、足は四本、二本、三本と変わるものは何か、というもので、テーバイ人が受けていた神託によれば、スフィンクスから解放されるのは謎を解いたとき、とされていたため、彼らは何度も一つところに集まり、言われている意味をさぐろうとした。しかし、答えが見つからないと、スフィンクスは一人ずつさらって食べてしまうのであった。大勢が命を落とし、ついにはクレオーンの子ハイモーンも死ぬと、クレオーンは布令を出し、謎を解いた者には王国とラーイオスの妻とを与えよう、と言った。オイディプースがそれを聞き、謎を解いた。曰く、スフィンクスが言った謎とは人間のことである、なぜなら、赤ん坊のときは四肢を使って進むので四つ足、体ができると二本足、年老いると三本目の足として杖を加えるから。すると、スフィンクスは城塞から身を投げ、オイディプースは王国を手に入れると同

時に、それとは知らず、母と結ばれた。

（『ギリシア神話』三・五・八）

このスフィンクスの話には不思議に思うことが二つほどある。まず、スフィンクスには翼があるのに、どうして謎を解かれたあと城塞から身を投げたのだろうか。空を飛ばない鳥もあるので、おそらく、これはつまらぬ疑問であろう。しかし、もう一つの疑問はオイディプースの物語に幾分かの意味をもっている。というのは、その頃テーバイには名高い予言者であるテイレシアースがおり、彼ならばスフィンクスの謎を解くこともたやすかったと思われるのに、テーバイ人によっては謎解きがなされなかったからである。ソポクレースは『オイディプース王』の中で、ラーイオス殺害犯を見つけるために自分が呼び出したテイレシアースから、彼自身が殺害犯であり、母親と交わったと聞かされ、激怒するオイディプースにこう言わせている。

さあ、言ってみよ。おまえのどこが真実の予言者なのか。歌を吟じる犬［スフィンクス］がこの地にいたとき、どうしておまえは町の人々を解放する言葉を吐かなかったのか。実際、あの謎というのは通りすがりの人間に解けるものではなく、予言の術が必要だった。ところが、それをおまえが使えず、鳥たちからも神々からも何一つ知りえぬことは明白だった。それは通りがかりの私、何も知らないオイディプースがあれを止めたのだ。知恵を働かせ、鳥から学んだりはせずにな。

（『オイディプース王』三九〇―三九八）

そうした矛盾にひょっとすると気をつかったのか、セネカは彼の『オイディプース』の中で、テイレシアースが面と向かってオイディプースに彼の罪を告げるのではなく、テイレシアースがラーイオスの霊

を冥界から呼び出して話させた次第をクレオーンが一緒に聞き、それを報告としてオイディプースに話す形をとっている。ラーイオスはオイディプースのことを、

あれは生まれた場所へ自分を押し込み、母親に非道な出産を繰り返させた。野獣でもめったにしないことなのに、自分の胤から自分の兄弟をもうけた。錯綜した悪行にして、あれが解決したスフィンクスよりもなお倒錯した怪物なのだ。

（『オイディプース』六三八―六四一）

と言ったという。この呪詛にも等しい言葉は、劇の冒頭でのオイディプースの科白と対比をなしている。そこでは、テーバイの国中に猛威を揮う疫病の前に挫けそうになる自分を励まし、自分の勇気を示すため、彼はスフィンクス退治に言及していた。

腰抜けという咎めや非難は私には縁遠い。私の勇気はおずおずと震えることを知らぬ。抜き身の剣を向けられても、恐るべき勢いで軍神マルスが私に突進しても、正面に獰猛な巨人族が立ち塞がっても、私は敢然と抵抗するだろう。スフィンクスが糸口の見えぬように言葉を絡めたときも、私は逃げなかった。私は踏ん張った、言うも恐ろしい予言者の血濡れた顎と骨が散乱して白い地面を目の前にしても。あれは崖の上からいまや獲物のほうへ身を乗り出し、翼を構え、鞭のように動かす尾で非情な獅子のように睨みを利かせていた。私が謎歌を求めるや、ぞっとする音が上方に響いた。両顎がぶつかって鳴り、待ちきれぬように岩を爪で割りながら私のはらわたを望んだ。運命をはらむ解きがたい言葉、絡み合った策略、翼ある野獣の陰鬱な謎歌を私は解いた。

（同八七―一〇二）

しかし、この冒頭場面とは対照的に、劇の結末では、オイディプースは自分の罪業を知って目をくりぬいたあと、さらに、自殺しようとする母イオカステーに手を貸すよう求められ、彼女の腹を剣で刺し貫く（同一〇二四以下）。皇帝ネローが母アグリッピーナに刺客を送って殺害した次第[3]を想起させるこの場面は、英雄をまさに「スフィンクスよりもなお倒錯した怪物」と見せながら劇に幕を下ろしている。

［注］

（1）ラーオメドーンは、アポッローンやヘーラクレースをだましたことで知られるトロイアの王。

（2）第Ⅱ部第3章第1節「カタロゴス」と第5節「照応」参照。

（3）タキトゥス『年代記』一四・八参照。